

## ゴケグモ類

### 1. 概要

ゴケグモ類の身体は光沢のある黒色で、腹面下部の黄色や赤の砂時計様斑紋によって確認できる。野外の堆積物や人家、その他の建造物などの薄暗い場所に立体的な網をはる小型ないし中型のクモで、攻撃性は少ない。

従来、日本には存在しないと思われてきたが、1995年末に大阪府でセアカゴケグモが、横浜市でハイイロゴケグモが、滋賀県でクロゴケグモが発見され、広く分布している可能性が指摘された。

非特異的に神経伝達物質の遊離を引き起こす神経毒を保有し、咬傷により全身症状をきたすおそれがあるが、毒の注入量も少ないため致命率は低いと考えられる。ただし、子供や高齢者、高血圧など循環器系疾患を呈している患者の咬傷には注意が必要である。

### 2. 毒性

大阪府立公衆衛生研究所の試験によって、クモ個体の毒性と毒量、注入毒量に差が認められている(1)

セアカゴケグモ : 皮下注 マウス LD50 0.9mg/kg(2)

ハイイロゴケグモ : LD50 (動物種不明) 0.43mg/kg

クロゴケグモ : LD50 (動物種不明) 1.39mg/kg(3)

メスは誕生時から毒を保有し、暖かい時期には毒性が最強となる。オスはメスよりも身体・毒腺とも小さく、攻撃性も少ないので人間に対する害は少ないと考えられる

### 3. 症状

咬傷だけでなく、クモの誤食でも全身症状をきたす場合がある(4)

初期症状 : 通常、針でさされたような疼痛があるが、気がつかないことも多い。  
痛みは数分でおさまるが、20~40分後に鈍い疼痛が再発する

局所症状 : 咬傷部は白く、その周辺がわずかに熱をもち、硬化する  
セアカゴケグモの場合には腫脹がみられる(4)  
局所的な発汗がある

全身症状 : 30分~2時間で激しい筋肉痛や筋痙攣がはじまる  
上腕を咬まれた場合は体上部の疼痛性痙攣(胸痛)が強く、下肢を咬まれた場合には腹部の痙攣(腹痛)が強い(3)  
筋線維性攣縮がときにみられ、筋硬直が腹部、肩、背中に生じる  
嘔気、嘔吐、血圧上昇、流涎、発熱、呼吸困難  
数時間から数日で症状はおさまるが、脱力、頭痛、筋肉痛、不眠、不安が数週間継続することがある

### 4. 処置

家庭で可能な処置

初期には氷で冷やすと痛みが軽減する

24時間以降は温湿布

医療機関での処置

応急処置 : 全身症状の発現を防止するような局所療法はない

呼吸管理、疼痛対策、筋弛緩対策など対症療法

## 抗毒素

適用：5歳以下、60歳以上、呼吸困難や著しい血圧上昇をきたしている患者、他の治療に反応しない場合に投与を考慮する

咬まれた後、24～48時間後の投与でも有効である

皮下テスト：皮下投与テスト用製剤（馬血清）0.02mL以下を投与

投与前処置：抗毒素投与前に抗ヒスタミン剤の経口投与と  
エピネフリンの皮下投与を行う

投与量：抗ヒスタミン剤投与15分後に1アンプル（500unit）を筋注する。  
1時間経過しても改善しない場合には再度投与する  
（重篤な患者には、1～2アンプルを50～100mLの乳酸加  
リンゲル液、または生食液に希釈し、1時間以上かけて静注する）

## 5. 確認事項

- 1) クモの種類を確認する
- 2) 患者の年齢や既往症（とくに循環器系疾患）の確認

## 6. 情報提供時の要点

- 1) 咬傷でも誤食でもゴケグモ類と推定される場合には、すぐに受診を指示。  
可能であればクモを持参する
- 2) 毒素の吸収を制限するような処置（緊縛）は、局所の痛みを増強するので避けるよう伝える

## 7. 中毒学的薬理作用

神経毒：神経筋接合部に作用し、アセチルコリンの遊離と涸渇をきたし、  
交感神経節に作用し、ノルエピネフリンの遊離と涸渇を引き起こす

## 8. 治療上の注意点

- 1) 抗毒素は馬の血清のため、アナフィラキシーが問題となる。セアカゴケグモ用のオーストラリア製剤によるアナフィラキシーの発生率は0.54%である。  
クロゴケグモ咬傷の多いアメリカでは、抗毒素の効果は確実であるが、合併症の発症率が高く、クモ毒による死亡の危険性より血清病やアナフィラキシーの危険性の方が統計的に高いことが指摘されている
- 2) 小児や高齢者、循環器症状を呈している患者以外は、全例経過観察すべきであるという意見がある(4)  
咬傷後24時間経過し、抗毒素を投与しなくても軽度の局所症状のみである場合には、抗毒素の投与は控えるべきである(5)
- 3) 疼痛対策：軽症ではアスピリンとコデイン、あるいはアセトアミノフェンとコデインの併用で対処。重篤な場合にはメペリジンやモルヒネなどが必要な場合がある
- 4) グルコン酸カルシウムの投与：痛みの除去には無効であるが、筋の痙攣を止めることに有効とされる。10%液10mLを10～20分かけて静注。  
3～4時間ごとに繰り返す。小児は50mg/kgを静注。500mg/kg/24時間まで（無菌性膿瘍の危険があるため筋注は避ける）。  
高カルシウム血症に注意

## 9. 参考文献

- (1)平成7年12月5日大阪府立公衆衛生研究所報道発表用資料
- (2)Struan K. S.、Australian Animal Toxins, Oxford University Press, Melbourne

- (3) Medical Toxicology ; Diagnosis and Treatment of Human Poisoning (1988)
- (4) Poisindex (1995)
- (5) Red Back Spider Antivenom product insert、 CSL Limited、 Australia

## 10. 作成日

19900215 Ver. 1.00

ID M70092\_0100\_2